

大将たる者の心構え

佐久間盛政

一龍斎貞花

講談師

本能寺の変ののち、羽柴秀吉は、亡き織田信長の跡目に三歳の信長の孫・三法師さんぼうし（織田秀信の幼名・織田家の家督を継ぎ岐阜城にて13万石の主となり、関ヶ原合戦に西軍に加担、わずか半日で名城岐阜を開城、城下の同徳寺で頭を丸め、その後高野山に蟄居、5年後26歳で病死）を立て後見役におさまり、思うがままに振る舞いはじめた。

信長の子・神部信孝かんのぶのぶたかを推した重臣筆頭柴田勝家は、2万の軍勢を率いて出陣し近江余吾湖のほとりに着陣。岐阜城の信孝、桑名の滝川一益かづますも呼応。

負けじと秀吉、まず一益を激しく攻めたてる。一益は「防ぐこと叶わず」といわずこともなく落ちていった。

先手の総大将、金沢12万石の佐久間盛政のもとへ、秀吉方から寝返った山路将監しやうげんが、

「賤ヶ岳しずがたけをはじめすべての要塞は堅固ですが、大岩山はにわかごしらえ、普請も粗末、他の砦とは離れており、攻め落とすこと可能と存じます」

喜んだ盛政、叔父の勝家に大岩山攻めを言上。しかし勝家は、「秀吉は油断出来ぬ相手」と許可しない。しかし盛政、なおも食い下がったため、

「攻め落としたならば、ただちに兵を引くよう」と、よくよくいましめ進撃を許可。盛政1万5千の兵を率いて大岩山を襲撃。勇将中川瀬兵衛清秀、1千の兵をもって必死に戦うといえど多勢に無勢、さすがの瀬兵衛も討死。これを聞くや岩崎山を守っていた高山右近、「次は自分が攻められる、これは大変」と戦わずして敗走。

盛政この勢いに乗じて短兵急たんべいきゆうに攻めれば、砦は次々に落とせただろうが、大岩山を落とし右近も逃げ出したため、すっかり心がおごり、攻めもしなければ、勝家からの「引き上げよ」という再三の命令も聞かず、居座ってしまった。

速攻の秀吉、三度馬を乗り換え大垣より一気に木ノ本へ。「こんなに早く寄せてこようとは」と驚いた盛政、あわてて退却を開始。勝家は、盛政軍を無事退却させてから合流せんと行動をはじめた。

早くもこれを見てとった秀吉軍、田上山から雨あられと鉄砲を浴びせる。さらには加藤清正、福島正則ら“賤ヶ嶽の七本槍”の若武者の大働きで、柴田の軍勢

散々に蹴散らされる。勝家わずかな手勢をまとめ、北国街道を急ぎ越前府中城へ。城主前田利家に対し、

「緒戦に勝ちを取めながら、盛政が引き上げぬため敗軍に及んだと申す者もあろうが、勝つも負けるも天の時によるもの、人の力にては如何とも致しかねる」

さすがは織田の元老、大きな度量の持ち主だけに、決して部下の誤りとは言わない。なおも利家に、

「御身の拙者に対する義理は足りている、このうえ貴公まで巻き添えにしては申し訳ないから、自分の身の立つようになされるがよい」

人間、死を決すると本当の値打ちが出るもの。勝家、勇猛だけの武将ではない。のちに北ノ庄城において、妻のお市の方と共に自刃。この時、娘の茶々（のちの秀吉の側室淀君）、お初（京極高次の妻）、お江（来年の大河ドラマの主人公、3人目の夫が徳川二代将軍秀忠。家光の母）の3人の娘を、秀吉の元へ送って命乞い。

大将の志というものは、

死の寸前まで、捨てるものではない

一方、賤ヶ岳の戦いで不覚にも捕われの身となった盛政は、秀吉の前へ引きすえられる。この時秀吉は盛政の戦いぶりをほめ

「合戦の勝敗は時の運、どうじゃ、わしに従わぬか」

「それがしがもし御身に從おうとも、いつかは必ずお手前あらがに抗い、叔父勝家の無念をお晴らし申す。いかなることがあろうとも主君勝家そむに叛く卑怯者にあらず。遠慮なく首討たれよ」

かくして六条河原の刑場へと引かれた盛政に、検死の浅野長政が

「貴公は、勝家殿の下知を聞かず、一つの勝利に慢心したがためにこの有様。捕らわれの身になりながら、叔父の無念を晴らしたいとは笑止千万。広言を吐くは身のほど知らずよ。素直に兜を脱いで秀吉公の招きに応じたらよいではないか」

これを聞くや、盛政敢然として

「何を申す、中国の戦国時代、呉王ごおうは父王の仇を忘れぬため、薪たきぎの上に臥して身を苦しめ、会稽山かいけいざんに於て越を破って父の仇を討ち、越王もまた苦い胆にがきもを嘗めて苦難を忍び、十数年のちに呉を破って無念を晴らした。我が朝ちやうに於ても、曾我兄弟は18年の間艱難辛苦し、源頼朝しゆんくは雌伏20年の末に父の仇を討ったるぞ。大将の志というものは、死の直前まで捨てるものではないわ。よく覚えておけよ」、きっぱりと言い、30歳いちじうを一期として六条河原の刑場にて首討たれたのでした。

敗北を部下の責任にしなかった勝家。志を死の寸前まで捨てなかった盛政。トップの姿勢はかくあってほしいものです。